

7年半を振り返って

川乗賀也

2021年3月をもって岩手県立大学を退職することになりました。私が赴任してきたのは2013年10月でした。時期としては中途半端な時でしたが岩手県という東北の中でも特に寒い場所に移住することについて、あたらしい仕事に対する期待と、生活できるのだろうか、という不安が錯綜している状況だったのを今では懐かしく思います。いざ、勤務を始めてみると講義の準備であったり、大学特有の委員会活動であったり慣れないことばかりで、自分にできることからやろうと思いつながらぬうちに体には負担が強いていたようです。自分では気づかなかったのですが、周囲から「痩せてきた、ちゃんと食事はできているのか。」と聞かれ、体重を久しぶりに測ってみると5Kg減っていました。もともと瘦型だったので、さすがに体調管理を意識しようと思いつつ、いまではもとに戻っています。

次に、実際の講義で学生について感じた印象は「レポートがちゃんと書けている」でした。これまで非常勤で専門学校での講師経験しかありませんでしたが、テーマに沿って字数制限を意識しながら提出されたレポートを見て、感動したものです。教員の立場から考えれば、当たり前にも思えることができない学生が増えてきていることは実感されている方もおられると思います。岩手県立大学では打てば響く学生がおおく教員としてもやりがいを感じていました。私が担当していた精神保健福祉士課程の学生も、卒業して多くが福祉の現場で活躍され卒業生から現場でのやり取りを聞くのが、ひそかな楽しみでもありました。

また、研究活動については社会的ひきこもりをメインのテーマにしており、県内の支援機関の皆様と非常に良い関係を築くことができました。なかでも思い出深いのは岩手県のひきこもりの実態調査でした。ひきこもりは社会に潜在してしまうために、必要な社会サービスが受けられない方がおおく、このような実態調査をおこなうことで、その地域にあった支援の構築に役立つとおもっています。また、在職中には多くの地域共同研究に関わらせていただくことができました。みなさまから不思議に思われているであろう、うまっこパークでの乗馬セラピーについても、教育研究

支援室から「うまっこの園長より、せっかく隣同士なので馬を活用（アニマルセラピー）し、県大とコラボして何かできないかという相談をされました。」という連絡をうけ、うまっこパークへ話を聞きに伺ったのが最初でした（実はこの時に初めて訪れました）。うまっこパークではすでに1000g以下で生まれた超低出生体重児を対象としてセラピー乗馬がおこなわれており、セラピーはやっているものの効果をどのように測定するのが課題のように思われ、それ以来セラピー乗馬の効果を測定するための実験をする日々が続きました（不思議に思われていた方もいらっしゃると思いますが、実はこのような経緯がありました）。

いまは研究室の窓から毎日ちがった見せ方をしてくれる岩手山をみるのが楽しみで、特に山頂に堆雪する日程を天気予報から予想したりしていました。単身赴任をしながらの7年半でしたが、この間に家族的なライフイベントが散発的に発生し、“家族に何かあったときにはその日のうちに帰省できる距離がいいな”と考え始めて今回の異動の主たる動機です。何回も岩手県立大学が実家の近くにあったらいいのに、と正直に思いましたが、当然それもかないません。様々な人と出会い、繋がり協力し合うことができた岩手県での教員生活でした。短い間でしたがお世話になりました。